

山河遙か

上州・先人の軌跡

□8□

「テニスの聖地」として親しまれる有明テニスの森公園。東京都江東区の十六軒ほどの敷地に四十八面の屋外コートのほか、一万人収容の有明コロシウムがある。

ここで昨年十月に開催された佐藤次郎の特別展を取材するため四月十六日に訪ねた。新緑が包むテニスコートにボールを打ち合う音が心地よく響いていた。

特別展にはラケット、トランクケース、優勝カッ

プなど遺品が並んだ。ほとんど目に触れることのない愛用品がテニスファンを引きつけた。「人物を取り上げた企画展は初めて。日本テニス史の偉大な人物であり、エポックメイキングの年になった」。企画した日本テニス協会テニスミュージアム委員会委員長の小田晶子(69)は説明する。

佐藤の遺品の隣には「マナーキッズテニス大使ウイ

ンブルドン派遣」のパネルが飾られた。一昨年からウインブルドンの開催期に合わせ、子供を英国に派遣、地元と交流してもらおう事業。そのアイデアは、佐藤のスポーツマンシップとコートマナーにヒントを得たという。

名選手 人格にも尊敬

アに高く評価され、「日本の生んだ最も立派な大使の一人」と言われた。

佐藤の精神を学んでもらおうと、日本テニス協会は三年前に「マナーキッズテニスプロジェクト」をスタートさせた。強さだけでなく礼儀作法を身に付けさせ、世界に通用する人材の育成を狙う。全国の小学生らを対象にテニス教室を展開。これまでに二万七千人超が参加した。

「戦闘意識はぜひ必要だが、常に相手を尊敬してかかるべきで、勝敗は結局人格にある」。佐藤はこうテニス観を述べる。いかなる判定にも不満をもらさない態度は、外国選手やメデイ

アに高く評価され、「日本の生んだ最も立派な大使の一人」と言われた。

選抜する。同プロジェクトディレクターの田中日出男(67)は、マナー低下について、本場英国でも問題視されていると指摘。「近年のスポーツは勝負一辺倒で、フェアプレーが消えている。日本人には礼儀正しき」というDNAが残っている

はず」と期待を寄せる。

ウインブルドン派遣もこの一環。全国大会で、成績やマナー・ルールの順守度、感想文などを総合評価し、六十八人のメンバーを

佐藤は一九三〇(昭和五年)、全日本ランク一位になり、翌年にデビスカップ日本代表に選ばれて以降、活動の場を海外に置き、全仏、ウインブルドンで活躍。さらに英国では各地を転戦、

十二連続のトーナメント優勝という記録もつくった。佐藤は海外でも名選手として、愛された。今年生誕

百年。なぜ佐藤が愛されたのか。その人格面に光が当たり始めている。(文中敬称略)

第4部 清水善造 佐藤次郎



有明コロシウムで昨年10月に開かれた佐藤次郎の特別展(日本テニス協会提供)＝東京都江東区